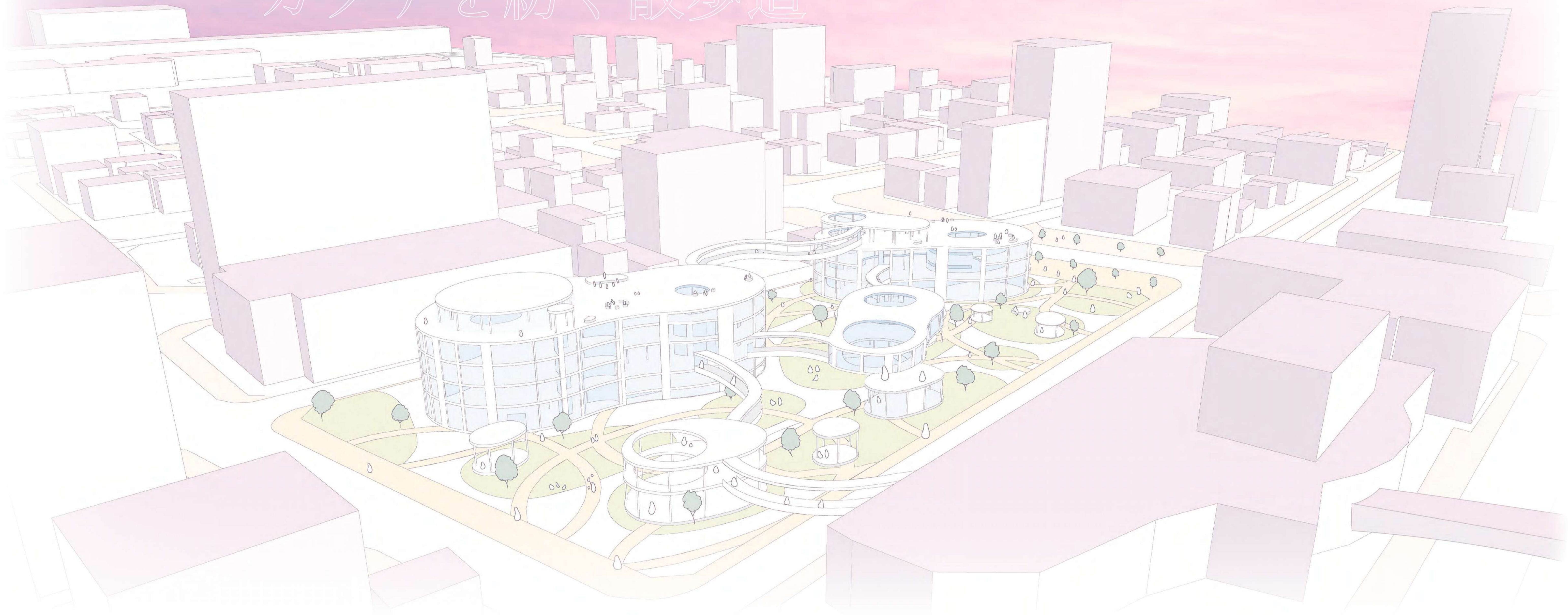


# カタチを紡ぐ散歩道



## 01. カタチと出会い

人は生きていく中で、多くの人と出会い、繋がり、関係を築いていく。そしてそれを通して学び、経験を積んでいく。しかしそれは自分の中にある力の成長であり、実際に目に見ることはできない。

つまり出会いとは目に見える物ではなく、自分たちで築き上げていく、無形の賜物である。ではいつ有形となるのか？それは他者に伝える時に、初めて目に見えるものとなる。それを“カタチ”という。

“カタチ”は自分たちの思想や経験を伝えるために、人の手で作り出された作品である。それは小さかったり大きかったり、柔らかかったり硬かったり、また色がついていたりなど、表現の仕方はさまざまで、全て異なる表情を持っている。そして“カタチ”と出会った人が、そこから自分にはない思いを感じ取り、次の“カタチ”を生み出すきっかけになることもある。

つまり“カタチ”とは人と人を繋ぐ役割をもち、次の“カタチ”を生み出すきっかけともなる。

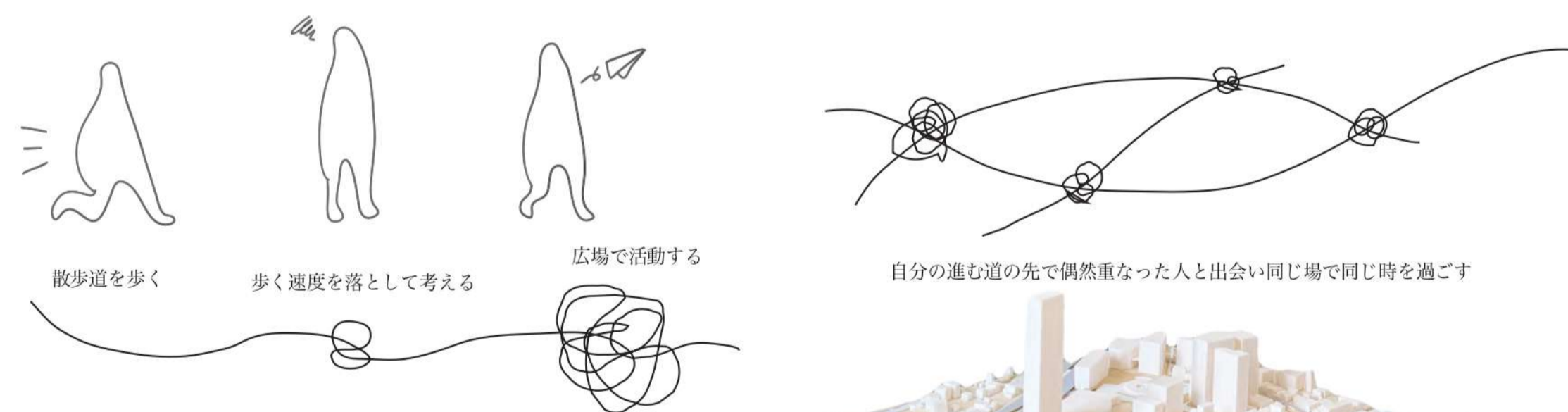
しかし今日では、メディアの多様化により出会いの方法に変化が起きており、“カタチ”と触れ合う場、生み出す場が減少している。本来出会いとは人と人が直接顔を合わせて、関係を築いていくものである。しかし今ではスマートフォンやパソコンなどの個人媒体で、いつでも好きな時に、足を運ばなくとも、物事と出会うことが可能となった。その出会いは間接的であり、そこから生まれるカタチと、カタチの伝達は、本来の役割を成していない。

そこでリアルな出会いの場と、カタチの伝達と創造を誘発させる場を提案する。



## 02. 動きの強弱

そこでとどまる建築ではなく、動きのある建築を提案。それにより出会いとカタチの誘発を促す。



色々な人や出来事が動きの途中で絡み合い、新たなカタチが生まれていく。その動きの強いところを散歩道、動きが弱まり絡まり合うところを広場とする。

そして散歩道がいくつかの広場を紡ぎ、カタチの連鎖を引き起こしていく。

## 03. 紙のカタチ

広場の至る所に紙のカタチを置き、その集う場を作る。紙のカタチとは、今という本をさし、それが集う場とは図書館を意味する。

つまり今ある図書館の固定概念から離れ、足りない部分を補った、新たな紙のカタチとの向き合い方、そしてそこから次の“カタチ”が生まれる連鎖を誘発していく。



## 04. 敷地：静岡県浜松市中区中央3丁目駐車場

戦争で建物が崩壊したのち、1947年に東第二地区区画整理が行われた。その際に「浜松の顔」となるよう、公園や学校を置き文教地区へと変った。しかし実際に足を踏み入れると人通りが少なく、閑散とした地区となっている。また、隣の商業地区へばかり人が流れ、この地区にあるガラス工房やパン屋さんなどが、市民に知られていない。そこで、この地区の新たな顔となる広場を置き、人の流れを生み出し、東地区のことを知らせてもらうきっかけを作る。



駅から屋根のある連絡通路が伸びているが、途中で打ち切られている一通路を伸ばして地域までおろして流れを作る